
僕はアルバイト

三代渡吉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

僕はアルバイト

【Nコード】

N4014E

【作者名】

三代渡吉

【あらすじ】

深夜のコンビニで働く、とあるアルバイトさんのお話。

僕は深夜勤務のコンビニアルバイト。自給が良いので、面倒が起きやすい深夜でも、なんとか我慢してやっている。

深夜はやっぱり酔っ払いが多い。

いきなり叫びだしたり、嘔吐したり、立ちションしたりと、まあ無法地帯もいいところ。

汚い真似をされることは稀だけど、酔って怒りっぽくなっているお客さんはたくさんいる。

僕は今まで五回くらい無意味に殴られたことがある。あまりにも殴られるので“殴られ屋、一回千円”と書いた帽子を被ったら、誰も殴らなくなった。

稼ぎ時だと思ったのに、残念だ。

酔っ払いといえば昨日、夜にコンビニ強盗をやっているというお客さんがきた。

やって来るなり開口一番「金を出せ」と言うので、レジの中身の三十万円を差し出してから

「三十万円になります」

と、僕はいつも通りのつまらない対応をした。

買いすぎたなー、なんていいながらその人は財布から三十万円を取り出して僕に突きつけると、急にため息をついた。そして、なんだか憂鬱そうな顔になって僕を見てきた。

面倒とは思ったけど、何をやってる方なんですかと聞いてみた。

そしたら、コンビニ強盗やってるんだと、彼はいう。

不景気だからお仕事大変でしょうなんて聞くと、いきなり強盗さんはすすり泣きし始めて

「上手く行くとときもあれば、からっきしな時もある」

と、悔しそうにそつぽを向いた。お子さんとかいらっしやるんじゃないですか？　なんて聞くと、今度は号泣し始めた。

酔ってるのかなあ、とその人を気遣うと、物凄く潤んだ目で

「兄ちゃんありがとう、俺子どものために足洗うよ」

なんて勝手に話を進めて帰ってしまった。

最近の勤め人は、老若男女関係なく根気が無いなあと思った。

僕はこれでもこのコンビニに勤め始めて二年は経つのに。周りの人間は五ヶ月も経たないうちにやめている。一週間でやめた人もいた。

日本人の根性は、一体どこへ行ってしまったのだろうか？

仕事について振り返りながら始まった今日、自分の子どもを捨てにやってきた、女の人がやってきた。

とはいえ、決まりは決まり。家庭のゴミは出さないでくださいと、僕は注意した。そもそも生ゴミなんてここに捨てるものじゃない。

そういつたら、女の人は鼓膜を突き抜けそうなくらいの大声で、僕にまくし立てた。

「だってこの子が言うこと聞かないからよ！　こんな知らない子は捨てるの！　捨てていいの！　わかる？」

「いらないかもしれませんが、こちらでも始末しかねますので、どうかしてください」

怒鳴る母の声を聞いて、子どももワンワンと泣き出した。

深夜なのに近所迷惑な……と困っていると、その人の夫らしい人が迎えにきて、母親の頬を引っ叩いた。

途端に泣き崩れる母親を尻目に、その夫は申し訳なさそうに腰を低くしながら

「お騒がせしました」

と深く僕に謝罪してきた。こういうことに慣れていない僕は、僕は適当に上手く返すと、二人を送っていった。

あんまりお客は選びたくないけど、夜にゴミを捨てにくる人と、

泣き止まない子どもを連れてくるお客さんはなんとかしてほしい。

翌日の工作中、昨日のことを引きずって眠そうにしていると、アメリカのフラーイン大統領候補がうちにやってきた。

僕はその人にあんまり興味がなかったので騒がなかったけど、どういうわけかその人は僕に馴れ馴れしく話しかけてきた。正直鬱陶しいけれど、無下には出来ない。

「私ね、本当はもう疲れてしまったの」

やけに流暢な日本語で、僕は少し笑ってしまいそうになったけれど、お客を不快にするわけにはいかないので、グツと耐える。

「本当は、相手のオバーマンのことを密かに愛しているの。夫よりもね、だけど、もうこの対立は止められないわ」

「禁断の愛ですね、燃えますか？」

「正直大統領選挙なんかより燃えるわ、あの人と一緒に駆け落ちしたいくらい」

「頑張ってくださいね」

適当に話しているうちに、僕は有名人のサインをもらっておけば後々高く売れるのではないかと思いつき、バックヤードに戻って店の商品を自腹で買い、サイン色紙を用意した。

ただでさえお金が無いのだから、こういうことをして一攫千金の気持ちで稼がないとやっていけない。

まだ居るよな？ ということを信じて店に出ると、店に銃を持った黒服の人達が来店していた。

強盗かな？ と僕が身構えると、その人はフラーイン氏を射殺してしまった。目的はそっちだったらしい。

あーあ、せっかくサイン貰おうと思っていたのに、と少し恨めしそうに見ると、その人達はトランシーバーを取り出して

「やりましたオバーマン候補。ついに奴を仕留めました、これで当選は確定ですね」

なんて少し話した後で、さっさと店から出て行ってしまった。よ

く見ると、おにぎりが蜂の巣になって全部駄目にされていたので、僕は「弁償しろ」と怒鳴りながら、その二人を追った。

弁償はちゃんとしてもらったけれど、まったく迷惑な話だ。ついでに、店に捨てていった生ゴミも引き取ってもらった。

いつになったら、お客さんは捨てていい場所を覚えてくれるんだろうな。

全く、お客様は神様とはよく言ったものだけど、それを良いことに好き勝手やりすぎじゃあないのか。

深夜のコンビ二をなんだと思っているのだろうか。

便利屋ならまだいいけれど、もしかしたら皆さん市民公園と勘違いなさっているのではなからうか？

今一度僕は、お客さんに問いたい。と頭では思いつつ、今日も僕はお客さんに深く頭を下げて、いつもどおりに「ありがとうございましたー」と、言うしかなかった。

クビにされたくないですから。

家に帰るのはいつも朝の七時だった。新聞受けにいつもの通り新聞が入っていたので、僕はそれを取り出すと、食卓でじつくりと今日の記事を読んだ。

最近テレビを見なくなっただから、世間に乗り遅れないためにもこれは欠かせない日課だ。

フライング大統領射殺という大きな見出しの下辺りに、“妻が子どもについての口論の末、夫を刺殺”という記事と、“連続コンビ二強盗殺人犯が自首”という記事が載っていた。

それを読んで、改めて僕は最近テレビというものを見てないことを悔やんだ。

「あのお客さんが新聞に載るほどの有名人だって知ってたら、サイン貰ってたのに」

金儲けのチャンスを逃したことを惜しみつつ、今日も僕は深夜勤

務のために、しっかりと睡眠を取ろうと、布団に入った。

明日は、もうちょっとマシなお客さんが来ます様に。

（後書き）

性懲りも無くごはんライス先生に触発されて、自分なりに工夫した形で書いてみました。

意外とコンビニだのスーパーだのは書いてて楽しくありますね。面白いかどうかは別として。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4014e/>

僕はアルバイト

2010年10月8日15時11分発行